

愛媛大学理学同窓会報

第9号

2015年2月



《目 次》

会長挨拶.....	2	会員の広場.....	12
学部長からのひとこと.....	2	総会報告.....	14
母校の窓.....	3	会計報告.....	15
教室だより.....	8	事務局だより.....	15
東京支部だより.....	11	あとがき.....	16



会 長 挨拶

理学同窓会 会長 東 雄 雄
(昭和45年卒)

皆様には益々ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。昨年9月の理学同窓会総会にて、城尾会長の後を受け、大役をお引き受けすることになりました。新機軸の提案や、リーダーシップの発揮が不得手な私ですので、皆様方からのご提案、ご支援及びご協力なくしては務まりません。よろしくお願い致します。

従来、同窓会総務を担ってきたのは、現職教員の高田裕美先生でした。現職教員に勤務時間外だけで作業が困難な負担を掛けることは、大学の服務規程上、問題が生じます。そこで、昨11月から小園愛美さんに毎週1回2時間程度、同窓会事務を手伝って頂くことにしました。このような雇用は、理学同窓会では初めてのことです。作業指示は総務担当幹事である高田先生並びに谷弘幸先生から主として出ることになっています。現在までは、同窓会資料の整理や本会報発行業務をお願いしています。高田先生に過重な負担が掛かることを避けるべきとの指摘は東京支部からも頂いており、総務担当幹事の増員と事務担当者雇用は、その対応への一環でもありました。

同窓会ホームページの更新ペースを上げるようにとの要望もありました。高田先生が一人で頑張っ

てこられたので、ペースに限界がありました。今春以降、総務担当幹事と小園さんで具体的に検討して頂くことになっています。ホームページのデザインやセキュリティについてアドバイスを頂ける方がいらっしゃれば大変助かります。ご協力のお申し出をお願いします。

今回東京支部から幾つかのご指摘ご要望を頂きました。これは非常に有り難いことです。人的及び費用面での制約がありますので、それら総てに応えられる訳ではありません。言うまでもなく、会員あつての同窓会ですから、会員及び支部からのご要望があり、それに応えるべく、幹事を交えて議論を交わすことが同窓会の存在そのものと発展にとって重要です。要望の類のみならず、同窓会や会員にお知らせしたいニュース、同期会などの開催広報、等々もお寄せ頂ければ、ホームページに掲載できるようになります。

最後になりますが、混沌とした社会・経済状況のもと、皆様方が、より一層ご健勝にてご活躍されますことを、幹事共々、心からお祈り申し上げ、ご挨拶といたします。

学部長からのひとこと



理学部長 宇 野 英 満

平成25年4月より理学部長を拝命している宇野です。最近の理学部に関連する動きについて紹介させていただきます。

皆様もご存知の通り、平成27年度で第二期中期計画が終了します。文科省は第二期中期計画を改革

加速期間と位置付けており、これに沿って平成25年度には、全国の国立大学に対して「ミッションの再定義」が要求されました。この「ミッションの再定義」は大学ごとではなく、大学の各学部に対してそれぞれ要求されたものです。全国の国立大学に対し

て大変厳しい要求が突き付けられました。本学でも教育学部では、いわゆるゼロ免の廃止と愛媛県教員に対する卒業生比率の大幅増を約束させられ、法文学部では、定員の見直しを迫られました。愛媛大学ではこれに対応し、文理協働で地域の問題を研究する新学部「社会共創学部（仮）」を平成28年度より発足させ、法文学部も改組縮小して人間社会学部（仮）とする計画を進めています。理学部における「ミッションの再定義」は、これまでの同窓生の皆様方の頑張りのおかげで、地方大学としては大変高い評価をしていただきました。研究面におきましては、理学部の人的資源をつぎ込んで組織した研究センターにおける研究が高く評価され、世界トップレベルを目指す研究成果を上げていると認められました。この成果は、平成26年度の科学研究費獲得状況にも如実に表れています。文科省より10月に今年度の科学研究費の獲得状況が公表されましたが、愛媛大学は旧二期校中では東京医科歯科大学に次いで2番目でした。さらに、今年度の公表では、細目ごとに大学の順位が示され、各大学の分野における強み分かるようになっていきます。これによりますと、岩石・鉱物・鉱床学の分野で2位、環境影響評価、環境リスク制御・評価の分野で3位となるなど、理学部が大きな貢献をしています。

ミッションの再定義をする作業の過程で理学部の今後の課題も浮き上がってきました。現在、理学部

は海外の7校（中国精華大学、ベトナム国立大学ハノイ校、ベトナムノン・ラム大学、インドネシアゴロンタロ大学、インドネシアバンドン工科大学、スウェーデンルンド大学、フランスブルゴーニュ大学）と学部間交流協定を締結していますが、交流の実態は非常に貧弱なものでした。教員同士の個人的な繋がりから細々と交流が続けているのが実態で、たくさんの留学生を受け入れたり、送り出したりする関係ではありませんでした。しかし、平成25年度より立ち上がった国際交流委員会の活躍もあり、平成26年度は（独）日本学生支援機構の資金を獲得して、11月にはインドネシアの大学から6名の短期留学生を地球科学科と生物学科に受け入れることができました。理学部の国際化に向けて着実に歩みを進めています。一方、数学、物理、化学の三学科では、欧州の大学との交流を目指しています。11月にはスウェーデンルンド大学理学部長オロフ・スターナー教授をお迎えして、両大学のさらなる交流を目指し、来年度は愛媛大学よりルンド大学に使節を派遣することを約束いたしました。

最後に、これからの愛媛大学理学部の発展には、理学部構成員のみならず社会の人々のご協力が不可欠です。中でも、理学部同窓会の皆様方のご協力・ご支援をお願いいたしまして私の挨拶を終わらせていただきます。

母 校 の 窓

母校、愛媛大学理学部では平成25年度末に生物学教室の佐藤成一先生、事務課長の村井佳名子氏が定

年退職されました。また平成26年度末に数学教室の内藤学先生、物理学教室の柏太郎先生、地球科学教室の皆川鉄雄先生が定年を迎えられます。皆様からメッセージをいただきました。



退職にあたって

内 藤 学

平成27年3月に定年退職を迎えるにあたって思い出等を書くよう依頼されました。しかし、私は元来の筆無精、文章書きは嫌いなので困惑しましたが、とにかく何か書いてみます。

私は平成7年4月に教授として赴任して以来愛媛大学理学部に20年間勤めさせていただきました。赴

任した頃は全国の国立大学で教養部の廃止・教養部教員の他学部への分属などの色々な大学組織改革が行われていました。愛媛大学では平成7年度をもって教養部が廃止になり、それに伴って理学部では翌年度からの学部の学科再編、博士後期課程（理学系）の設置等がありました。私は赴任後まだ1年でした

が数理科学科の最初の学科長を務めました。その際、先輩の教授や多くの先生方のご指導・ご協力を戴きました。当時の教員の方々にあらためて感謝する次第です。

その頃、大学の会議や講義・セミナーの合間に気分転換をするためによく理学部キャンパス内の小さな林を散歩しました（今は、その場所に総合研究棟が建っています。講義棟の東側にはテニスコートもありました）。それにしても、愛媛大学は自然環境に恵まれた処にあります。護国神社、一草庵、御幸寺山麓の寺々…と散策するのも気持ちの良いものでした。

私が理学部数学科（あるいは、数理科学科）の20年間で指導教員として担当したのは、結局（見込みを含んで）、学部生70名、マスター学生15名、ドクター学位取得学生2名でした。数学を多くの若者と一緒に勉強できたことは大変幸せでした。これら学生には（もちろん、理学部の全卒業生、全在学生にも）愛媛大学理学部で学んだことに自信と誇りをもって日々過ごして戴きたい。

私の研究分野は解析学、とくに“実領域における常微分方程式論”です。これまで40年間ずっと2階

あるいは高階の常微分方程式の解の振動的性質と漸近的性質について研究してきました。常微分方程式論は使う道具立てが少ないので、逆に、研究が難しいこともあるのですが、幸いなことに解決したい問題は涸渇することなく、どうにか論文を書き続けることができました。「隣の花は赤い」と言って、人のやっている研究は面白く華々しく見えたが、私にとっては、同じテーマで研究してきたことが良かったようです。しかし、最近の（とくに、若い）研究者には色々な分野に興味をもって研究を進めて欲しいと思います。

退職後も、細々とではありますが、やはり常微分方程式の研究を続けていきたいと思っています。数学は極論すれば一人で自宅の居間で研究できますし、今後は趣味としての数学ですから、のんびりと気楽にやっていきます。

以上、取り留めのない文章になりましたがお許しください。

愛媛大学でお会いした多くの学生、教員、職員の皆様に親しくご交誼いただいたこと深く感謝しております。末筆になりましたが、皆様方の益々のご発展とご健康を心からお祈り申し上げます。



退職に関して思うこと

柏 太 郎

就職するまでは、1ヵ所に長くて10年留まるのが自分の人生かなと思っていた。小学校4年生までの東京・世田谷のあと、埼玉・浦和で18歳まで過ごし、その後5年ずつの宮城・仙台、愛知・名古屋での大学、大学院生活。しかし前任地、福岡には20年以上に渡り慣れ親しんでしまい、母の生まれ故郷である松山に赴任して13年である。

名古屋大学で博士論文を書きあげた当時は、職のないオーバードクターの時代（今より厳しかった。ポスドクは国内ではほとんど皆無。外国に行くほかなかった）。アメリカで6年間ポスドクを死ぬ気でやって、だめだったらあっさりやめて別のことを（はっきりと何をやるか決めていたわけではないが）やるつもりで、素粒子奨学生として京都大学基礎物理学研究所で1年間、筑波の高エネルギー物理学研究所でさらに半年間過ごした。幸運にも九州大学理学部に職を得ることが出来たときは、妻と二人で万歳三唱したものだ。

職を得てからは35年あまりの研究・教育生活である。助手・助教授時代は楽しくて仕方なかった。昼過ぎに大学に行って、大学院生と議論しては、年に1、2本の論文を書いて、毎晩のように、時には朝まで酒を酌み交わした。カナダに長期滞在した折には、友人のカナダ人に『うらやましいな太郎は。気分転換やストレス解消が普通は必要なのに、趣味が仕事になっているから。』と言われたときは、実感はなかったが、後に痛いほどこの言葉が心に突き刺さることになる。

愛媛大学に着任した2002（平成14）年には、大学法人化の具体化が問題となり始めており、理学部では教育改革が始まっていた。赴任挨拶の後、当時の柳沢学部長、野倉評議員と学部長室での雑談の折、カリキュラムの話題になった。直前に九大で物理のカリキュラム改革をやってきたばかりなので、あれこれ経験談をぶっていると突然、『これからの理学部も教育改革正念場なので、手伝ってくれ』と言わ

れた。これが全ての始まりであった。理学部発祥の教育コーディネーターの統括をやることになり、(すべて同じ時期に)学部長補佐、評議員、統括研究コーディネーター・経営政策室などと研究・教育以外の仕事に忙殺されるようになった。何もかもが、法人化に伴う初めてのことで誰も経験がない。学長・評議会メンバー・学部長・補佐室メンバーで話し合いながら進むほかなかった。必然的に多くの時間を費やすこととなる。方針は、ある程度トップダウンで出すしかないが、教育に関しては、文科省の顔色をうかがいながらのものは特に評判が悪い。ストレスはたまる一方である。日曜日は本当に、マルクス・エンゲルスの言葉じゃないが『労働力の再生産過程』であった。こんな生活のなか、松山に呼び寄せた母も94歳の生涯を閉じていった。父も、ここで亡くなっているの、松山は父母の死所と言うことになる。

忙しい中でも、研究との接点は単行本(演習場の量子論:サイエンス社・量子場を学ぶための場の解析力学:講談社・演習線り込み群:サイエンス社)や事典(大辞林・新物理学小事典:三省堂)などの執筆でかろうじて保っていたが、数年前からは法人

化後の施策もようやく安定化してきて、前例にならう仕事が増えてきた。特に最後の3年間は、理学部執行部の若返りもあって、研究・教育中心の生活に返ることが出来、10年ぶりに論文を書き、新たな単行本2冊の執筆に費やす十分な時間を持てることになった(経路積分に関するものは2015年秋に裳華房から、相対性理論に関するものは、数学書房から出版される)。

退職後はカナダのオカナガン地方のペンティントンという町でのんびり過ごすのが夢であったが、現実はなかなか厳しく、しばらくは本の執筆と、(非常勤での)講義のブラッシュアップなどの仕事を続けることになりそうだ。週に10万歩を目標に、体力を維持しながら、時には山登りでもしようと思っ

ている。
最後になったが、これからも理学部という特質を、つまり、すぐには結果の出ない基礎研究を強力にサポートする体質を、前面に出した愛媛大学理学部であることを切望して、筆を置きたい。

長い間、お世話になりました。これからもよろしくお願いします。

恩師の思い出

佐藤成一

愛媛大学には37年間お世話になり昨年無事に定年を迎えました。この間、いろいろなことがあり過ぎて何を書けばよいのかわかりませんが、お世話になった方々、なかでも、愛媛大学に赴任するきっかけをつくってくれた大学時代の二人の恩師のことが真っ先に浮かんできます。学部及び修士課程でご指導いただいた広島大学理学部の田中隆荘先生と大学院博士課程でお世話になった京都大学原子炉実験所の石田政弘先生についての思い出話を紹介して挨拶に代えさせていただきます。

私が田中先生にお世話になったのは、先生が「日本産菊の起源と進化のしくみ」を明らかにされた下斗米直昌先生の研究室を引き継ぎ、教授になられて間もない頃でした。ご専門は細胞遺伝学で、植物の核型分析や育種学に大きな足跡を残されています。特に、ラン科植物の分類・進化の研究で知られています。先生は、どんな学生でも辛抱強く慈愛に満ちた態度で接し、失敗を責めるようなことは一切しませんでした。私にも幾つか思い出に残る失敗談があります。当時昆虫採集が趣味の一つであった私は、沖縄に一度でいいから行ってみたいと常々思ってい

ました。そんな折、私が修士課程に進学した昭和47年5月15日に沖縄が日本に返還されました。好都合なことに事務手続きで遅配されていた奨学金が6月に3カ月分まとめて手に入りました。そしてすぐ夏休みです。これは沖縄に行くまたとない絶好のチャンスです。私は夏休みに乗じて教員には何も告げず、1週間ほど沖縄全土をめぐり県の天然記念物のコノハチョウ以外の沖縄に生息している全種類の蝶を採集して大満足で大学に帰ってきました。直後に、田中先生から呼び出しを受け、「貰えない人がいるのにそんなふうに奨学金を使うのはどうだろう」と諭されたことがあります。しかし、穏やかでゆっくりした口調でかすかに笑みを浮かべながらお話になるので素直な気持ちで聞くことができました。もう一つ思い出に残る失敗があります。研究室共同で使用しているカメラをうっかり開けてしまい、中に入っていたフィルムを感光させてしまったのです。それを見ていた助手の方が血相を変えて近づいてきて、田中先生のところに行くから一緒に来いということで行きました。にこにこしながら仔細を聞いていた先生は、カメラの中に使用中の

フィルムが入っていることが分かるようにしておかなかったのが悪いのではないかと逆に助手の方を諫め、私をかばってくれたのです。先生は当たり前のことを言っただけだったかもしれませんが、この時の経験がその後学生を指導する上で多少生かされた様な気がします。

博士課程に進学すると同時に、田中先生の勧めがあって大阪府熊取町にある京都大学原子炉実験所で2年間お世話になりました。そこには、当時、田中先生と懇意にしていた石田政弘先生が葉緑体 DNA に関する研究をしておられました。私も、葉緑体 DNA の合成に関する研究をしていましたので、お世話になることになったのです。石田先生は、米国コロンビア大学の Sager の研究室で葉緑体 DNA を発見し、京都大学に戻ってきて間もない新進気鋭の研究者でした。そのお人柄は四文字熟語で表現すると、豪放磊落、才気渾発そして天真爛漫といった言葉で形容され、気さくで自由な雰囲気をもっておられました。その言動はしらふでも冗談と本気が区別できないほどで、お酒が入るとさらにエスカレートし、話の真偽の境界が全く分からなくなり、周りを惑わせることがよくありました。例えば、「自分は石田三成の子孫である」から始まり、「若い時には北海道を独立させる夢をもっていた。若い者はそれ位大きな夢をもたなあかん」といったような話がどんどんでてくるわけです。半分あきれながらも、おもしろいので適当に相槌を打ちながら話を合わせるわけです。ただ、石田先生の実家は数百年前に建てられた立派なお屋敷で祖先が2万石の大名であったという噂がありましたので、石田三成とつながりがあるという話はまんざら嘘ではなかったかもしれません。先生は、とても学識が広く、そしてなにより発想がユニークで、話を聞いていて飽きることがありませんでした。ところが、研究の指導は直接することは一切ありませんでした。矢継ぎ早に、いろいろなアイデアを出す、決してこうしなさいとは言いません。あくまで何をやるかは自由でした。こ

れは、愛媛大学に赴任後、一人で研究しなければならなくなった時、大変役に立ちました。

昭和51年に愛媛大学に採用が決まった時、先生がはなむけにくれた言葉が「佐藤君、愛媛に行ったら、一旗揚げんとあかんぞ。」でした。その後、この言葉は研究に行き詰まった時の励みとなりました。愛媛大学に赴任時に、設備と研究費の関係で研究テーマを変更せざるを得なくなり、考えあぐねた末、核小体について顕微鏡を使った研究をすることにしました。理由は、葉緑体リボソーム RNA に関する研究をしていたので、同じリボソーム RNA を含む核小体に興味があったことと、何よりもあまり関心を持つ人がいなかったことで、競争やお金を気にせずに研究できそうだったことです。いろいろ苦労がありましたが、当時ほとんど解明されていなかった核小体の構造についてかなりすっきりと理解できる程度の成果をまとめることができました。

大学時代にこのように大きな影響を与えてくれた先生方と巡り合えることができたことを大変幸運に思っています。田中先生の研究に対する真摯な姿勢と慈愛に満ちた指導そして石田先生の自由な発想と研究の厳しさ、励ましの言葉は、迷いや困難に遭遇した時に私を教育研究生生活の原点に立たせてくれました。田中先生は、その後広島大学の学長、そして広島市立大学の初代学長になり両大学の教育研究の改革や運営に尽力されました。そして、平成20年に82歳で永眠されました。石田先生は、平成12年に享年73歳の若さでお亡くなりになりました。永眠されたお顔は十分人生を楽しんだのか、大変安らかで「佐藤君、ムシロ旗でも揚げることができたかね」といわれそうな気がしました。先生の名は、国際エンドサイトバイオロジー学会が設置したミーシャー・石田賞に刻まれ、その功績が称えられています。補足ですが、理学部の施設や教育研究の環境は今や素晴らしく整備され、私が赴任した当時とは隔世の感があります。最後に、理学部の今後の教育研究の益々の発展と卒業生の皆さんのご活躍を祈念しております。



はるか昔を振り返って

皆 川 鉄 雄

私が東雲小学生のころの楽しみの一つに、愛媛大学城北キャンパスの原っぱでの虫とりがありました。キャンパスはかつての練兵場（軍の演習場）跡

地に設立されたのですが、昭和30年ごろの大学には今のような施設はほとんどなくキャンパスの北西一帯には草原が広がっており、学校帰りにここに立ち

寄る多くの小学生がいました。塾通いする子供もほとんどいなくて、帰り道に立ち寄り、また日曜の長い一日を過ごすこともありました。当時の男子大学生の多くは今と異なり、学生服の上着（ただし女性の服装の記憶はありません）を着ており、またかなりの学生が大学のマークの入った学生帽を被っていたと記憶しています。御幸中学校（現東中学校）時代は、理学部の前身である文理学部のキャンパスを訪れるのが楽しみでした。木造校舎の1階には後の地球科学科教授になられた地学教室の宮久研究室があったのですが、建物の中には入ったことはありませんでした。

昭和43年愛媛大学農学部農芸化学科に入学し、卒論研究は土壤肥料学教室を希望しました。土壤肥料学教室には船引真吾教授、吉永長則助教授、電顕が専門の山口助手がおられました。船引先生は、日本で初めてX線粉末回折法を用いて土壤中の粘土鉱物の同定を行った先生であり、吉永先生はイモゴと呼ばれる火山灰から新しい粘土鉱物「イモゴライト」を発見された火山灰粘土鉱物学の第一人者でした。研究室は九州大学と肩を並べる日本を代表する土壤学研究室として知られていました。当然研究設備も充実しておりXRD（加熱装置付）、IR、TG-DTA、TEM、化学分析装置など粘土鉱物を研究する上で必要な分析機器が全て揃っていました。吉永先生の研究指導を受けましたが、いまでも思い出すが、厳しく指導されたガラス器具の洗浄方法と毎日の実験台の拭き掃除です。洗ったあとガラス器具に水滴が残っていると、駄目だしがありました。また朝、昼、夜と実験台の上を拭くことが日課でした。今では考えられないことですが、当時の実験室の天井はアスベストがむきだしの状態であり、ごくまれに実験台上に落ちてくることがあったのです。

卒業後は、2年間の聴講生を経た後、土壤肥料学教室の技官として就職しました。吉永先生の指導のもとイモゴライト研究の他に、フィールドワーク、住友化学との共同研究である稲のポット試験等の多くの雑用をやっていましたが、自由な時間もあり、休みには TENT を担いで日本各地の山を駆け巡っていました。研究時間の合間には好きだった鉱物の検討も吉永先生の許しを得て行っていました。鉱物に関して分からないことがあれば、理学部の宮久研究室にお邪魔して教えを請いました。時には九州の金属鉱床、特に金、銀、錫鉱床の調査に同行させていただいたことも多々あります。串木野鉱山、赤石鉱山、岩戸鉱山、豊栄鉱山などの調査はほんとうに楽しい思い出です。宮久先生の名前を出すとどここの鉱山もフリーパスでした。とんでもない先生だったことをいまさらながら感じています。ある時、築地書

館から「四国地方鉱物採集の旅」の執筆依頼があったのですが、一緒にやりませんかと声をかけて頂きました。二つ返事でお引き受けし、四国の鉱物産地をめぐる日が続きました。出版までに2年ぐらいかかったのですが、その間の夜おそくまでの打ち合わせも楽しい思い出です。

しばらくたって理学部に新しく地球科学科が誕生することが決定し、技官の定員がついたので来ませんかとお誘いがありました。それまで私自身、鉱物には興味がありましたが、地球科学科の職員になることなどまったく考えていませんでした。おまけに、そのお誘いは街の本屋でばったりお会いした時でした。あの時お会いしなかったら、今は無かったかもしれません。吉永先生に相談したところ研究室としては困るが、君自身は理学部に移ったほうが良いというお言葉を頂き、理学部に移ることを決心しました。地球科学科技官として先生方の薄片作成、X線装置の修理、学生実験の手伝い、フィールド調査や、学会用のスライド作成などの雑用すべてやりました。その後縁あって助手になってからは、桃井斉先生の研究室に所属し、マンガン鉱物の検討を主テーマにし現在に至っています。その間、1年間、北海道大学の針谷研究室にお世話になったのですが、研究そっちのけで北海道の林道を走り回り、鉱物採集に明け暮れていました。また毎週技官の方とお酒を酌み交わしていたことも懐かしい思い出です。

愛媛大学に入学し愛媛大学で定年を迎え、今やっと卒業するような気分です。まだまだ老け込む年ではないと思っはいるのですが、いつまで思えるかあやしいものです。ただこれから新しい鉱物の発見・研究に少しでも係わることができればと願っています。幸いなことに私の研究室を出た多くの石好きの学生と現在も交流があり、また研究者として活躍されている方もおられます。もう少しは頑張ってみようと思っています。

吉永長則先生、桃井斉先生、宮久三千年先生、針谷宥先生をはじめ、多くの先生方にはほんとうにお世話になりました。また事務の方々にもたいへんお世話になりました、心から感謝いたします。



理学部の思い出

村 井 佳名子

私は、平成10～12年度の3年間及び平成23～25年度の3年間の計6年間で理学部でお世話になり、平成26年3月末に定年を迎えました。

大好きな理学部で二度も勤められたこと、そして定年を迎えることができたことを、とてもありがたく幸せに思っています。

最初に理学部に配属された時に驚いたのは、先生同士がさん付けで呼びあっていらっしゃることでした。それまで所属していた学部では、上位職の先生に対しては「〇〇先生」と呼ぶのが当然のことでした。最初は驚きましたが、理学部に慣れるにつれ、理学部の自由度の大きさを示す一つの例なのかな、と思うようになりました。理学部は城北地区にありながら、他の学部と道路を隔てた立地の故か、独特の空気が流れているキャンパスでした。南国を思わせる木が並び立つロータリー、憩いの森と称される緑の空間が何とも魅力的でした。事務職員と先生方との距離も近く、事前に各人の活躍度を予想した出走表なるものが配られる理学部ボウリング大会など、折々に楽しい行事もありました。

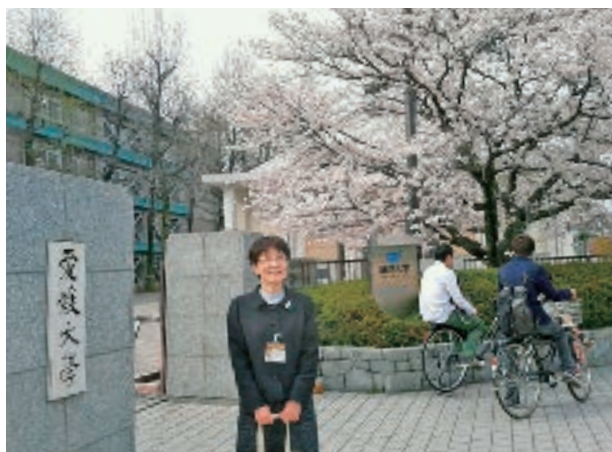
平成11年4月に、事務組織の集中化で職員数が半減し、しばらくは混乱を極めました。そこはチームワークのよい理学部のこと、先生方のご協力(と、事務職員の頑張り!)によって、いつの間にか落ち着いていたものでした。

二度目に配属された時には、大好きだった憩いの森をはじめ、温室やテニスコートが姿を消して、キャンパスの景色が変わっていたことに少々寂しさを感

じましたが、理学部の温かさは変わらぬままでした。ある先生から、「おかえりなさい」と声をかけていただいた時の嬉しさは、今も忘れられません。また、5学科に戻されたり、入試制度や学生支援等々、教育システムや教育環境の整備に力を入れられて、他学部にも率先して新たな仕組みを取り入れられていること、各研究センターが大きく発展されていることが、とても印象的に映りました。

その後の3年間はまたたく間に過ぎ、今は大学から離れた生活を送っていますが、辞めた後も特に気になりますのが、デマンド問題です。改修工事に伴う省エネ化によって、“理学部の暑く長い夏”が少しでも緩和されんことを切に願っています。

最後に、あらためまして理学部の皆様方に心からのお礼を申し上げますとともに、理学部及び理学同窓会のますますのご発展をお祈り申し上げます。



教室だより

[数学教室]

同窓会の皆様には各分野でご活躍のことと存じます。前回の同窓会報から2年が経っております。数学教室の教員・学生の近況について報告いたします。

まず数学教室の人事について報告いたします。平成25年3月に野倉嗣紀教授が定年のためご退職され、安部利之准教授が愛媛大学教育学部に教授として転出されました。野倉先生の後任としては、島根大学大学院理工学研究科から山内貴光先生が准教授として平成26年4月に着任され、安部先生の後任としては、

京都大学数理解析研究所から大下達也先生が助教として平成26年8月に着任されました。また平成25年度に松浦真也准教授が教授へと昇任され、平成26年度に尾國新一助教が准教授へと昇任されました。

なお、平成27年3月には内藤学先生が退職される予定です。現在の数学教室の詳細については、ホームページ <http://www.math.sci.ehime-u.ac.jp/index.html> をご覧ください。

次に、学生の就職状況についてご報告いたします。前回ご報告しましたように、数学科学学生・大学院生の多くが卒業・修了後の進路として中学・高校教員を目指し、実際に平成25年度卒業・修了者のうち16名が教壇に立ち、平成26年度の卒業・修了予定者においても16名が教員を希望しております。民間企

業・公務員への就職についても、おおむね順調のようです。これからも社会の期待に応えられる数学の能力を身につけた学生を送り出していきたいと考えております。卒業生の皆様におかれましても、一層のご支援・ご協力が頂戴できれば幸いです。

平成25年10月から翌年3月にかけて理学部2号館(数学棟)の耐震改修工事が行われ、それにともない1階の図書室を大きく改装しました。学生や教員の勉学・教育・研究における利便性の向上を目指して、今後さらなる整備を進めていきたいと思ひます。

11月のホームカミングデイに合わせて、数学科では公開講座を開催し多くの卒業生の皆様にご参加頂いております。これからどうか皆様から多くのご助言とご協力を頂ければ甚だ有り難く存じます。

末筆ながら、皆様のますますのご発展とご健康をお祈り申し上げます。(内藤 記)

【物理学教室】

皆様にはお元気でご活躍のことと存じます。平成23年2月以降の教室の動きをご報告いたします。

人事では、平成23年3月に京都大学に転出された長尾透先生が平成25年11月に宇宙進化センターの教授として着任しました。平成26年4月には、教室事務に永年ご尽力くださった高岡千安喜さんが化学科へ移動され、門屋由美子さんを化学科から迎えました。しかし、門屋さんは12月末日をもって退職され、平岡由布子さんが総務チームから移られました。平成27年2月時点での教室の構成は教員19名、技術職員1名、事務職員1名です。平成27年3月には柏太郎先生、奥村彦彦さんが退職される予定です。

先日も同窓生の皆様に旧交を温めていただく集まりとして、また教室、学部、大学の“今”を知っていただく機会の一つとして愛媛大学ホームカミングデーがあり、15人の同窓生が遠路はるばる参加してくれました。教室としても普段から皆様との連絡を密にとる必要性を感じており、連絡網の整備を急ぎたいと考えています。その節はご協力をお願いします。

この10年間で教員のほぼ半数が入れ替わりましたので、ここで現在の教員を紹介します。年代によっては、卒論生として、また修士・博士論文研究で指導を受けたことを、講義・演習を受講したことを思い出す方々もいるでしょう。理論物理学では、柏太郎(素粒子論)、宗博人(素粒子論)、瀧崎員弘(非平衡統計物理学)、飯塚剛(非線形物理学)、楠瀬博明(磁性、超伝導理論)、松岡千博(数理物理学)、宮田竜彦(統計力学・溶液論)、物性物理学では、栗栖牧生(熱電物理学)、前原常弘(プラズマ理工学)、神森達雄(磁性物理学)、小西健介(磁性・低

温物理学)、近藤久雄(光物性)、さらに宇宙物理学では、谷口義明(天文学)、栗木久光(X線天文学)、寺島雄一(天文学)、長尾透(天文学)、清水徹(太陽系プラズマ物理)、近藤光志(超高層物理学)、鍛冶澤賢(天文学)が、学部と大学院の教育研究に携わっています。院生はMC、DC 総勢29名、研究室配属の4回生50名がそれぞれの目標に向かって勉学に励んでいます。

人員削減がじわじわと教室運営を苦しめていく現状がありますが、全員でこれまで以上に教育・研究活動に励んでいきますので、なお一層のご支援をお願いいたします。末筆ながら、皆様の益々のご発展を祈念いたします。(栗栖 記)

注意：各教員の専門は、愛媛大学教育研究者要覧に記載の専門分野欄から抜粋、記載無き場合は本人からの申告を採用。理学部案内に記載の順に記載。

【化学教室】

化学教室は、前号(2013年2月発行)の時点から見て、一部顔ぶれも組織も新しくなり、現在5つの系列と9つの研究室があります。有機化学、無機化学、分析化学、固体物理化学、構造化学、複合体化学と、プロテオサイエンスセンター(PROS;旧無細胞生命科学工学研究センター)の兼任教員による生物化学研究室、総合科学研究支援センター(INCS)および沿岸環境科学研究センター(CMES)の研究室です。これらが物性化学系、構造化学系、有機化学系、生物化学系、環境化学系の5つの系列に分かれて研究と教育に当たっています。有機化学は、宇野英満教授、奥島鉄雄准教授、中江隆博助教で運営されていましたが、中江隆博助教が平成26年3月をもって京都大学へ異動され、代わって平成27年1月1日付で首都大学東京から高瀬雅祥先生が准教授として着任される予定です。無機化学は高橋亮治教授と、平成25年4月に着任された佐藤文哉助教とで運営されています。分析化学は、島崎洋次准教授に加え、平成22年11月に着任された紙谷浩之教授がいらっしゃいましたが、平成26年6月をもって広島大学へ転出され、平成27年4月に着任を目指して現在教授を選考中です。物理化学は固体物理化学研究室と名前を変えて、平成23年4月から内藤俊雄教授が運営していました。平成25年4月から山本貴准教授が大阪大学から着任し、現在この2名の協力体制で運営されています。構造化学は、長岡伸一教授、小原敬士准教授、垣内拓大特任講師で運営されています。なお垣内先生は平成25年1月に特任講師の名称を付与されています。複合体化学は、森本和也助教が平成26年3月に産業技術総合研究所へ異動され、

佐藤久子教授が運営にあたっています。生命科学は、林秀則教授と杉浦美羽准教授で運営しています。INCSは、谷弘幸准教授、倉本誠准教授、森重樹助教で運営しています。CMESは、平成25年4月から化学科に加わっていただき、田辺信介教授、磯部友彦准教授、野見山桂助教で運営されていましたが、平成26年4月に磯部先生が国立環境研究所に異動され、同4月に国末達也教授を鳥取大学からお迎えしました。以上、現在19名の教員で教育研究に携わっています。（内藤 記）

【生物学教室】

卒業生の皆様におかれましては、お元気でご活躍のことと存じます。

前号の理学同窓会報（第8号）以降の生物学教室の近況をお知らせいたします。教室関係の人事では、前理学院長であった佐藤成一教授は平成26年3月で定年退職されましたが、客員教授として残られ、講義の一部を担当していただいています。一方、平成25年11月に和多田正義准教授が、平成26年12月には中島敏幸准教授が教授に昇進されました。

現在の生物学教室は、「進化」をキーワードに教育研究領域を「形態形成」、「生理・適応」、「生態・環境」の3つに分け、それぞれの研究分野に各先生が研究グループを形成するという体制を取っています。「形態形成」領域は、「植物形態」分野の佐藤康准教授と金田剛史助教、「動物発生」分野の小南哲也教授と高田裕美准教授、「進化形態」分野の村上安則准教授と福井真生子助教がそれぞれの研究グループを形成しています。「生理・適応」領域は、「植物生理」分野の井上雅裕教授、佐久間洋准教授、「動物生理」分野の加納正道教授、「魚類環境生理」分野の北村真一准教授、「環境生体応答学」分野は仲山慶助教が研究グループを形成しています。「生態・環境」領域は、「生態・進化」分野の中島敏幸教授、「水域生態」分野の井上幹生准教授、大森浩二准教授、畑啓生助教、「動物遺伝」分野の和多田正義教授、「環境毒性学」分野の岩田久人教授が研究グループを形成しています。岩田教授、大森准教授、北村准教授、仲山助教は沿岸環境研究センターの教員ですが、理工学研究科（理学系）の生物学の教員とともに生物学科の学生の教育を担当しています。

学生の近況についてご報告いたしますと、平成26年には、大学院博士後期課程の学生が2名、博士前期課程の学生が26名、卒業研究生に至っては56名が各研究室に所属し、研究を行っております。このうち3名の卒業研究生は中国とベトナムからの留学生で、最近では短期留学も含めるとアメリカ、フラン

ス、インドネシアからも留学生が来ており、愛媛大学の生物学科においても国際化の波がしっかりと押し寄せてきていることが分かります。最後になりましたが、卒業生の皆様のこれからのご活躍とご健康を心から願っております。（和多田 記）

【地球科学教室】

理学部同窓生の皆様におかれましては、益々お元気にご活躍のことと存じます。地球科学科の近況をご報告いたします。平成25年3月31日付けで川崎智佑教授が定年退職をむかえられました。沿岸環境科学研究センター教授磯辺篤彦先生が平成25年3月、九州大学に転出され、平成26年8月には地球深部ダイナミクスセンター助教丹下康範先生がスプリング8に転出されました。平成26年4月に郭新宇先生が教授に昇任されました。そして平成25年4月に花崗岩岩石学がご専門の齊藤哲先生が助教として、平成26年4月に哺乳類化石がご専門の鰐本武久先生が准教授として着任されました。同9月には実験的手法で下部マントル層をご研究されている西真之先生がGRC助教として着任されました。また同10月に堀利栄先生が教授に昇任されました。さてご存知のようにGRC、CMESの研究センターには、世界各国から多くの研究者が訪れ、国際研究機関として世界をリードしています。最近では地球科学科も榊原先生のご努力により、JASSOの留学生受け入れ派遣プログラムなどにより、インドネシアの大学数校から留学生（修士、博士）、短期の交換留学生を受け入れるようになりました。また地球科学科からも院生、4回生、3回生がインドネシアの大学に短期留学しており、国際化が進みつつあります。院生室に飛び交う英語、インドネシア語や廊下を行き来する留学生の姿がそれを象徴しています。一方、大学院進学 of 学生はほぼ定員数であり、多くの院生がいた4、5年前に比べて減少気味です。ここ数年の就職状況好転が原因なのかもしれません。

平成28年度には新しい学部が創設され学生募集が始まりますが、これを機に、愛媛大学の更なる改革が求められています。理学部そして地球科学科も例外ではなく、新しく生まれ変わらなければなりません。地球科学科の教員数は他の学科の半数程度であり、管理運営における教員の負担は他学科以上です。今後ますます忙しくなることを覚悟しなければなりません。教育面においても地球科学教室に属するGRC教員、CMES教員と共に、より充実したカリキュラムを編成し学生指導に当たる所存です。地球科学科同窓生の皆様には今後ともご支援、ご協力を頂けたら幸いです。（皆川 記）

東京支部だより

東京支部活動報告

理学同窓会東京支部より近況を報告いたします。

まず平成25年9月7日(土)に、前年に続いて東京の天王洲ヤマツピアを拠点に第28回東京支部総会及び懇親会を実施しました。懇親会は前年同様に東京湾クルーズという形にしましたが、クルーズ船出発の前に愛媛大学大学院 理工学研究科 数理物質科学専攻 物性科学分野 前原常弘先生(数学)が上京してくださり、「水中で輝く数千度のプラズマ」という題でお話をしてくださいました。

前原先生の関東在住卒業生が多く集まり、講演会も充実したものとなりました。

総会終了後に乗船し、船内で懇親会を実施しました。伊藤東京支部長による挨拶後、松山からいらっしゃいました宇野英満理学部長(化学)・東長雄理学同窓副会長・就職担当の土屋卓也先生(数学)から挨拶をいただきました。他に山本明彦副理学部長(地球科学)・奥島鉄雄先生(化学)・旧制松山高等学校同窓会東京支部・工業会東京支部・ユウカリ会東京支部・東京章光会・愛媛大学サテライトオフィス東京・教育学部同窓会東京支部・松山市東京事務所をはじめとして、多くの方々のご臨席を承りました。天候にも恵まれ、船上デッキから見る東京湾の光景に向けてカメラのシャッターを切っている参加者が多数いらっしゃいました。

非常に好評であった東京湾クルーズとのセットという形式を維持して、平成26年9月13日(土)の第29回東京支部総会及び懇親会も天王洲ヤマツピアを拠点に実施しました。総会と懇親会前の講演会では、愛媛大学理学部化学科名誉教授の向井和男先生が、「農産物、食品の抗酸化活性評価法「SOAC法」の開発」という題でお話をしてくださいました。化学科の卒業生を中心に多くの方が参加してくださいましたという良い結果につながりました。



総会終了後に乗船し、例年通り船内で懇親会を実施しました。伊藤東京支部長による挨拶後、松山からいらっしゃいました宇野英満理学部長(化学)・東長雄理学同窓会長・就職担当の土屋卓也先生(数学)から挨拶をいただきました。他に旧制松山高等学校同窓会東京支部・工業会東京支部・ユウカリ会東京支部・東京章光会・愛媛大学サテライトオフィス東京・教育学部同窓会東京支部をはじめとして、多くの方々のご臨席を承りました。当日はやや風が強くクルーズ船が揺れましたが、晴天に恵まれ心地よい東京湾周遊となりました。中でもコースの中に羽田空港沖の停泊を入れたことによって、旅客機の着陸を真正面から真上に向かって眺めることができ、迫力ある写真を撮っていらっしゃる方が多数いらっしゃいました。更にクルーズ船による懇親会終了後も化学科の卒業生によって二次会が開催されるなど、東京支部を盛り上げていこうという大変良い流れを作ることができました。

個人的なことではありますが、私は東京支部の総務幹事を務めさせていただき11年になります。当初幹事を引き継ぐ際に先輩から『2年でいいから引き受けてほしい』と頼まれ引き受けたものの、結果的に10年以上も務めることになっています。この間、東京支部の役員が一時期だけ私一人の孤独な時期もありましたが、昨今の活動状況を拝見していますと東京支部役員や東京支部総会の参加者数などを見ても明らかなように『活動が活発になってきたなあ』と思うところがあります。ただこの流れを再び先細りさせることは絶対に避けてほしいというのが私からの意見です。新しい東京支部会員の加入や東京支部役員の交代によって新しい風を吹き込み、その時代に合った東京支部となって、東京支部総会への参加者数も増えてほしいと思っていますところでありす。首都圏在住の卒業生の皆様には、ぜひとも諸活動への参加をどうぞよろしくお願いいたします。

なお愛媛大学校友会についてですが、理学同窓会東京支部は単に理学同窓会としての業務にとどまらず、校友会首都圏支部の活動にも協力しています。



現状では東京支部役員が校友会業務と同窓会業務の2つを掛け持ちで本職の仕事の合間にこなしています。大変ですが、校友会によって他学部と交流できるようになったと私は考えています。特に毎年実施の校友会主催による就職支援ツアーによって現役学生達が上京してくる際には、情報交換会の受け入れ準備を他学部と合同で実施しています。

校友会首都圏支部にも皆様のご協力を何とぞよろしくお願い致します。

長くなりましたが、今後も卒業生の皆様の益々のご発展とご健康を祈念いたします。

2014年11月

総務幹事：佐伯 雅弘（理・数学・13回）

会 員 の 広 場

理学部と松山南高校スーパーサイエンスハイスクール

地球科学科1回（昭和56年）卒業
大学院地球科学専攻1回（昭和58年）修了 千葉 昇

私は、1977年に理学部地球科学科に1期生として入学した。さらに、81年には大学院理工学研究科に進学、84年には愛媛県立学校教員として採用になった。2校で数年間勤務したのち、県立博物館へ異動になった。そこでいろいろと勉強させてもらいながら（やりたい放題をしていたとの声もあるが）、10年をすごしたのち、2001年に松山南高校に異動した。松山南高のSSH事業（詳細後述）は2002年から第一期3年、2005年から第二期5年、そして2010年からの第三期5年目が終わろうとしている。私は、2010年3月で異動したので、第三期は計画のみで、実施を内部から見えていない。2002年から2010年まで高校側から見たSSHと愛媛大学とのかかわりを紹介したい。高校側、それも理科の一教師の目線で述べるので、ニュアンスや経緯が多少くいちがうかもしれないことをお許しいただきたい。

1年目の冬をむかえたある日、理科主任から「このたび、校長の発案で文部科学省が新規に募集する『スーパーサイエンスハイスクール事業（SSH事業）』に応募することになった」と話があった。「採択されたら、すごい金額の予算がつく」とも言われた。予算は2,500万円ということだったが、その額が毎年支給されるのか、それとも3年間の合計なのかわからなかった。いずれにせよ、わからないことだらけだった。文部科学省のホームページを調べると、概算要求の概要が掲載されていた。理工系人材を育成するための研究開発事業であり、学習指導要領に縛られないカリキュラムを設定することができるほか、期間は3年間、全国で20校程度を選ぶということであった。要求予算総額も掲載されており、それを見ると、どうやら先の数字は年間だろうとい

うことになった。申請書を作り上げるまでの期間は2カ月程度しかなく、とてもあわただしく準備に取り組んだ。

2002年の春、全国26校のひとつに選ばれた。SSH事業は、文科省でも全く初めての事業であり、見本のない状態からのスタートであった。松山南高校内には校内組織「SSH委員会」をつくり、前年度の理科主任が就任した。この事業は、高校内のアイデアや努力だけでは進展しないのは明らかであった。研究開発には、大学の協力・連携が不可欠であると判断したため、県教育委員会指導主事と校長が愛媛大学へ協力依頼をお願いするため訪問した。理学部が窓口となり、全面的な協力をいただけることになった。これを受けて、学校長とSSH委員長が、柳沢康信理学部長を訪ねることになった。私も同行せよということになり、理学部を訪問した。柳沢学部長からは、積極的に協力すること、特に「SSHの事業は、愛媛大学の事業としてとらえており、全面的に協力する」とのお言葉をいただいた。大学の事業なので謝金も受け取らないとも後にいわれた。言葉だけでなく、その後の事業展開においても、きわめて手厚いサポートであった。SSH事業では、運営指導委員会を設け、ご意見や評価をいただくことになっていた。この委員会にも理学部から5名の先生方に参加していただき、遠山鴻教授には委員長をしていただき、さらには大学側の窓口にもなっていただいた。

SSHが始まると、多くの先生方に授業をしていただいた。マイスナー効果を松山南高校の生徒に見せるために、神森先生は液体窒素容器を持って徒歩で来校された。法令により自家用車では運搬できな

いたための対応だったとお聞きした。あいにくと、徒歩では旅費が支給できない規定であり、旅費なし・謝金なしでそこまでしていただき、われわれはたいへん恐縮した。

理数科生徒40名が参加するはじめての研究室体験では、13研究室の研究室にそれぞれ3日間、3人程度の生徒を受け入れていただき充実した研修を受けることができた。この体験研修でも、参加研究室の募集など、遠山先生には大変お世話になった。進学を希望する分野の研究室へ行った生徒に好評だけでなく、別の研究室の話聞いた生徒が「そんな分野があるなら進学してみたい」というような効果もあった。

このように、理学部をはじめとする愛媛大学の先生方には、高大連携・高大接続の面で先進的な取り組みをしていただいた。新しい取り組みに苦労はし

たが、わくわくしながら取り組めたのも理学部の先生方のおかげである。柳沢学部長に、「理学部はどうしてあれほどSSHに協力してくださるのですか」と尋ねたことがある。柳沢先生は「理学部が地元へ貢献できるひとつとして、教育面での貢献を選んだ」と言われた。2005年には、理・工・農学部にまたがるスーパーサイエンス特別コース（SSC）が設置され、特色ある入学選抜も導入された。また、SSHに指定された宇和島東高校やスーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定された松山東高校も、愛媛大学のお世話になっているのではないだろうか。

「SSHって、すごくしんどいハイスクールやらか」。「いや、スーパーすばらしいハイスクールじゃろう」。理学部に感謝。



キャンパスの樹木

理学部化学科10期生 大学院修士課程化学専攻4期生

京都工芸繊維大学大学院 教授（専門 構造化学） 田 嶋 邦 彦

一昨年の秋、キャンパスの大木を見上げていた数人の初老の男性が口々に、「これは、あの木か?」、「こんなに大きくなったのか!」、「卒業から40年以上やからな」。この何気ない会話を聞きながら、母校のキャンパスで見覚えのある某かの「目印」を探すのは卒業生の習性だなと妙に共感しました。私が愛媛大学理学部から現在の勤務先である京都工芸繊維大学に移って約20年が経過しました。この間にキャンパスの景色は様変わりしましたので、久しぶりに大学を訪れた卒業生諸氏はこの大木の他に「目印」を発見できなかったのでしょうか。この大木は春の新緑、夏の木洩れ日、冬にはイカルの群れが木の実をついばみ、四季折々に楽しませてくれる私のお気に入りでしたが、残念ながら、この大木も昨春の改築工事で姿を消しました。

理学部キャンパスの樹木の代表選手といえば、2013年の会誌（第8号）の表紙を飾る「椰子の木」（正確な名前は分かりません）でしょう。私が化学科助手の時代に撮影した卒業式（いまでは学位授与式）のスナップ写真の背景には、かなりの頻度で「椰子の木」が収められていました。当時からの「椰子の木」は理学部キャンパスの重要な「目印」であったようです。私が学生の頃、「椰子の木」の葉先は飛び上がれば手が届く程度の高さしかなく、私達は

「椰子の木」の植え込みでバーベキューや餅つき（今では考えられませんね）を楽しみました。この表紙の「椰子の木」を眺めていると不思議に様々な妄想が浮かび上がってきます。まず、この「椰子の木」は3階建ての講義棟を上回る大木として撮影されているので、間違えるほどに大きく成長した「椰子の木」を収めたいという撮影者の意図が窺えます。さらに、この撮影者は小さかった頃の「椰子の木」を知っている卒業生、おそらくは、文理から理学部への移行期の卒業生ではないかという勝手な推理が続きます。妄想はほどほどにして、理学部キャンパスの「椰子の木」を話題にした寄稿文は皆無と信じて、このまま筆を進めます。

私は少なくとも毎年一度は理学部にお邪魔をしています。数年前には藤棚やベンチが整備されて変貌を遂げた理学部キャンパスには大変驚きました。そして、「椰子の木」が改修後のキャンパスでも素晴らしい存在感を醸し出していることに安堵しました。後日、在阪の同窓生に理学部のキャンパスが変貌した旨を話すと、「椰子の木は何本やった?」、「玄関前の円形の植え込みはどうなった?（無くなりました）」、「講義棟との渡り廊下はあるのか?（もちろんあります）」等々、理学部キャンパスの「目印」が次々と登場します。現在の理学部キャンパスの写

真を見ようと、校友会のHPに公開されている四季のフォトギャラリーを訪問しました。ここにはメインキャンパスの図書館と学生会館周辺の紅葉した並木の写真などが多数紹介されています。理学部キャンパスの写真には、青空に映える4本の「椰子の木」が写っていました。やはり、南国風の「椰子の木」には青空が似合うなどと独り合点していると、玄関前に造成された新しい植え込み（私が知らないだけです）に気づきました。この植え込みは、その配置と形状からしてキャンパスの新しい「目印」になることは確実で、3月の学位授与式に多数の卒業生諸君がこの植え込みを背景にしてスナップ写真を撮影する様子が目に浮かびます。そして、数十年後に大きく成長した植え込みの樹木を見上げると「こんなに大きくなったのか！」の台詞が口を衝き、たまには理学部キャンパスに足を運ぶのも悪くないかと、少しほっこりとした心持ちになることで

しょう。このように、大きく成長したキャンパスの樹木は卒業生の記憶を刺激するようです。

キャンパスの樹木を毎日のように目にしている人々にとって、それは四季の変化を教えてくれる背景のような存在ですから、たとえば、20年間でどれほど成長したかと問われたとしても「背景が変わらない程度」としか答えられないでしょう。しかし、久しぶりにキャンパスを訪れた卒業生にとって突然に大きく成長したかのように見えるキャンパスの樹木は、年月の経過をやんわりと知らせてくれる趣深い「目印」としての意味を持つようです。いずれにしても、理学部キャンパスの樹木の維持・管理にご尽力を頂いた皆様のご努力と高い見識に敬意を表します。これからも、理学部キャンパスの樹木が健やかに成長することを心底から祈念して、この拙稿を閉じることにします。

総 会 報 告

昨年9月6日(土)14:00から愛媛大学南加記念ホール(旧記念講堂)で総会が開催されました。総会に先立ち、地球深部ダイナミクス研究センターの大藤弘明先生の「高温高压下におけるダイヤモンド合成とその応用」と題する講演会が行われました。小休止の後、総会に移り、城尾昌範同窓会会長の議長のもと、平成24年・25年の活動報告、会計報告が行われました。その後、先に役員会で審議された次期会長および監査役の推薦案が城尾会長により提示され会長に東長雄氏、監査役に桑原英了氏が再任、二宮啓二氏が就任されました。続いて会則に従って会長推薦により副会長および幹事が委嘱されました。同窓会をより発展させる目的で新たに幹事が2名加わり、向こう2年間は下記のメンバーが中心になり同窓会を運営することになりました。その他、理学同窓会東京支部の石川貴之氏による東京支部の活動報告があり総会を終了しました。



総会の後、会場を校友会館内のイタリアンレストラン「セ・トリアン」で恩師5名のご臨席のもと約49名の参加者で懇親会が開催されました。東新会長の挨拶に続いて宇野理学部長の祝辞の後、池田逞元同窓会長の乾杯ではじまり約2時間旧交を温めました。最後に井上直樹先生の万歳三唱、2年後の再会を約し、懇親会を終了しました。

理学同窓会役員

〈顧問〉

宇野 英満《理学部長》
亀岡 久志《理学部事務課長》

〈会長〉

東 長雄《文理：化学 18回》

〈副会長〉

仲田 秀雄《文理：物理 20回》
大谷 勲《理学：数学 5回》

〈幹事〉

岩本 孝《理学：物理 1回》
永井 博《理学：化学 2回》
奥田 一晶《理学：生物 8回》
千葉 昇《理学：地球 1回》
谷 弘幸《理学：化学 12回》
佐伯 雅弘《理学：数学 13回》
森本 千恵《理学：化学 13回》
小笠原恵子《理学：地球 5回》
高田 裕美《理学：生物 16回》

〈監査〉

桑原 英了《理学：地球 5回》
二宮 啓二《理学：化学 14回》

会 計 報 告

平成24年度（2012. 4～2013. 3）

収 入		支 出	
平成23年度より繰り越し	¥22,800,975	通 信 費	¥49,384
会 費（225人）	¥1,125,000	名 簿 管 理 費	¥76,650
利 子	¥12,108	東 京 支 部 補 助	¥500,420
		運 営 費	¥77,581
		会 報 発 行	¥1,028,070
		卒 業 生 記 念 品	¥150,415
		総 会 準 備	¥695,203
		平成25年度へ繰り越し	¥21,360,360
収 入 計	¥23,938,083	支 出 計	¥23,938,083

平成25年度（2013. 4～2014. 3）

収 入		支 出	
平成24年度より繰り越し	¥21,360,360	通 信 費	¥55,434
会 費（235人）	¥1,175,000	名 簿 管 理 費	¥120,750
利 子	¥6,334	東 京 支 部 補 助	¥500,000
		運 営 費	¥45,099
		卒 業 生 記 念 品	¥159,375
		平成26年度へ繰り越し	¥21,661,036
収 入 計	¥22,541,694	支 出 計	¥22,541,694

事 務 局 だ よ り

本部事務局より平成24年秋からの主な活動を報告し、原稿募集のお願いをいたします。

1. 役員会の開催

平成25年度の役員会を8月22日に開催しました。12名の役員が参加し、1年間の活動報告・計画を説明して論議しました。

平成26年度の役員会を6月23日開催しました。主な議題は総会開催準備についてでした。総会を9月6日(土)に開催し、その時の講演会を地球深部ダイナミクス研究センターの大藤弘明先生にお願いすることとなりました。

平成26年8月21日に松山近郊の役員が集まり総会の準備、役割分担等を協議して開催に備えました。今後さらに理学同窓会活動を活発にするために、次期幹事候補2名にも参加していただきました。総会当日の詳細は、総会の報告をご参照ください。

2. 会報の発行

平成20年9月に城尾会長の下に理学同窓会の活動を活性化することになり会報も2年ごとに発行することになりました。前号の会報8号は平成25年2月に発行しました。新同窓生には卒業式に手渡すことができました。また、本同窓会の会員は約8,000名

ですが、連絡先が判明している3,580名に会報を送付して、あて先不明で110通が返送されてきました。住所を変更された方はメールまたは同封の連絡ハガキにて同窓会にお知らせくださるようお願いいたします。また、平成26年9月の総会后、会報第9号(本会報)発行の準備も進めてまいりました。

3. その他

平成24年度、25年度の卒業式当日に新会員（卒業生）約300名に記念品（同窓会名入りのボールペン）を贈り、住所連絡用の書類を渡して新しい住所が決まったら同窓会に連絡するようお願いしました。卒業記念パーティーでも城尾会長が挨拶においてお願いしました。この他に、ホームページの更新、会員名簿の管理も随時行っています。

4. ホームページの原稿募集のお願い

理学同窓会のホームページ（<http://www.sci.ehime-u.ac.jp/rigaku>）では下記の2項目について同窓生の皆様からの原稿を募集します。投稿は郵便かメールでお願いいたします。なお、これらの原稿は同窓会報にも掲載させていただく場合があります。また、より多くの会員の近況を事務局で把握するために、同窓生による小規模な同窓会の開催やユニークな活動をしている会員の情報、さらに本同窓会員が職業や社会活動などにより受賞をしたというようなニュースなどご存知の方は事務局へお知らせください。

《会合だより》

同窓生の皆様の会合開催等の原稿を募集しています。それぞれの学科で同期会等を多々開催されているとお聞きます。今後はこの様な会を開かれたら本部事務局にもご一報くだされば幸いです。ホームページで報告したいと考えています。写真も歓迎します。また、会の開催案内もホームページの“ニュー

ース”・“会合だより”により広報できると思いますので、是非ご活用ください。

《会員近況》

近況報告欄の原稿を募集します。同窓生の皆様の近況をお知らせください。写真つきも歓迎します。ふるって投稿ください。お待ちしております。

あ と が き

愛媛大学は平成16年に法人化されましたが、理学部ではその数年前から、沿岸環境科学研究センターや地球深部ダイナミクス研究センターなど特色ある研究センターを設立し科学教育の充実に向けた教育改革が進められていました。当時は高校教育現場においても、文部科学省から「スーパーサイエンスハイスクール（将来の国際的な科学技術関係人材育成のため、先進的な理数教育を実施する高校）」(SSH)構想が示された時期でもあります。SSHの指定は全国20校という狭き門であり、実施には大学との連携がほぼ必須条件となっていました。平成14年度指定に向けた松山南高校の取り組みに対し、当時の愛媛大学学長及び理学部長から賛同をいただき、具体的な内容や方法また連携の在り方等については研究センターの先生方のご協力が得られました。さらに

愛媛大学理学部では平成17年度に「スーパーサイエンス特別コース（理系の人材育成，研究者養成を目的とした課程）」が設置されるなど，高校教育に協力的であるとともに将来科学技術研究者を目指す学生にとっても，魅力的な大学となりました。現在，各研究センターにおける世界トップレベルの研究が高く評価されており，今後もより一層の発展が期待されます。

本会報にお寄せいただいた玉稿には，ご退職の先生方の思い出やご活躍ぶり，また理学部各学科の最新の状況・動向など，多くの貴重な情報が発信されており，それぞれが興味深いものでした。理学部のますますの発展のためにも，会員の皆様それぞれのご活躍や活動の状況，さらに相互交流や体験談など，情報を共有したいと考えております。今後とも理学同窓会へのご支援，ご協力をよろしくお願いいたします。（I. O）



愛媛大学理学同窓会 会報 第9号（文理学部同窓会報より通算21号）

平成27年2月 発行 愛媛大学理学同窓会

〒790-8577 松山市文京町2-5 愛媛大学理学部内 FAX：089-927-8424

メールアドレス：rigakudousoukai@sci.ehime-u.ac.jp

ホームページアドレス：http://www.sci.ehime-u.ac.jp/rigaku